

# 不登校生徒との2年間の関わり —攻撃性表出の重要性—

The Relationship with Truants for Two Years  
— the importance of the expression of aggression —

寺井弘実  
Hiromi Terai

## 〈要旨〉

文部科学省の調査によると、平成20年度の長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、「不登校」を理由とする児童生徒は合計12万7千人であり、小・中学校ともに前年度からは減少傾向にある<sup>1)</sup>。しかしながら、中学校では、35人に1人の割合であり、1クラスに約1人の「不登校生徒」がいることになり、むしろ一般化してきている現状である。

そのため、「不登校の原因」は多様な側面をもち、相談機関での心理臨床的関与だけでは対処できないケースが増えてきており、相談機関と学校側との連携が重要となる。

今回の事例では「描画」という非言語的方法で「攻撃的感情を表出する」ことで安定した以降、学校空間に通いだし、その自信から徐々に「言語」を用いて「こころの内面」を語り、高校進学に至った過程から、子どもの精神発達において、「思春期におけるネガティブ感情表出の重要性」と、それを支援する「学校との連携の必要性」を考察する。

## 〈キーワード〉

不登校, 攻撃性, 描画, 思春期

## 1 はじめに

文科省の調査によれば、平成20年度長期欠席者（30日以上欠席者）のうち「不登校」を理由とする児童生徒数は、全国の小学校で2万3千人（全小学生に占める割合＝0.32%・対前年度比：5.3%減）、中学校では10万4千人（全中学生に占める割合＝2.89%・対前年度比：1.2%減）の合計12万7千人（対前年度比：1.9%減）。この割合は平成17年度以降ほぼ横ばいとなっている。しかし中学校では35人に1人の割合で「不登校生徒」がおり、依然としてクラスに1人の現状である。むしろ「不登校が一般化」してきているとも言える。（小学校児童は約300人に1人の割合）

このような「一般化」から、不登校のきっかけは多様化してきており、従来のような「相談室での個別的関わり」（言語でのカウンセリング等）だけでは、子どもの成長が促されないケースが増えてきている。

不登校臨床における理解の枠組みの技法として、斎藤<sup>2)</sup>は、不登校の多軸評価を提唱する。これは、第1軸：背景疾患の背景、第2軸：発達障害の背景、第3軸：不登校出現様式による下位分類の評価（過剰適応型不登校、受動型不登校、受動攻撃型不登校、衝動統制未熟型不登校、混合

型不登校）、第4軸：不登校の経過に関する評価（不登校準備段階、不登校開始段階、ひきこもり段階、社会との再会段階）、第5軸：環境評価（家庭機能、ライフイベント、学校の特徴支援機関の有無）等の多方面からのアセスメントの重要性を強調している。特に、第5軸の進め方は慎重性が必要であるが、不登校生徒の発達過程における重要な課題であると私は認識している。

本事例は、中学校の2年間に渡る、不登校生徒との面接過程である。面接当初は言葉数が少ないために、描画法の・バウムテスト・MSSMを使用し、徐々に自らの気持ちを「言語」で語り始め、学校内の相談室や適応指導教室を利用して外の世界との関わりを持ち、高校進学に至った過程を、「思春期のこころのなかの攻撃性を描画で表現することの重要性」と「学校連携」いう視点から考察する。

## 2 事例の概要

個人が特定できないように、細部は変更してあります。

【相談者】：Aさん。中学2年生。

【主訴】：朝、腹痛・吐き気のために不登校

【家族構成】：両親・Aさん・弟の4人暮らし

父親は会社員・母親はパート勤務

【生育歴】：保育園時代も喜んでは登園しなかった。小学校入学以降から、朝、腹痛・吐き気で登校できない日があったが、連続しては休まずに登校していた。中学1年入学時から、月に3～4日休むようになる。担任から、校内の相談室登校を勧められて、数回通ったが中断。中学2年生になり、完全に不登校となる。

【問題の経過】：X年11月、上記主訴で来所。

以後、卒業まで15回の面接を重ねた。

【面接構造】：月1回50分の面接・

【インタビュー：#1】：本人に声かけするが、ほとんど返答なく、緊張した様子で下を向いて座っている。非常に元気がなく、無表情であり、まるで空気が抜けた風船のように見えた。

言語での関わりではなく、非言語的な関わり（描画法・MSSM）から始めたほうが良いと判断して、初回にバウムテストを施行した。素直に応じる。

〈バウムテスト施行①〉

- ・消しゴムを多用する。実は黒く塗りつぶされており、10個描き、後半3個消した。
- ・枝は3本。樹冠からはみ出しているもの2本と樹冠に包まれず、下方から1本伸びている。枝の先は3本共に鋭く尖っている。
- ・バランスは良く、画用紙の中央に描かれているが、根はない。

\*「元来的なこころのエネルギーは十分あるが、幼少期から、自分以外のことでエネルギーを多用してきているのではないか。また、対人感情は攻撃的でありながらも、それを隠そうとしているが、うまく自分のこころのなかで、収めきれていないのではないか？  
また、自分の行為への自信のなさも強いのか？」

バウムテスト施行後、小さな声で以下のように話す。『自分がどのように、見られているかが気になる。自分は人と接するのは得意じゃない』

【見立て】

- ・幼児期から周りに気を使いながら生きてきたのではないか？幼児期に行く「否定的な感情」を甘えられる対象へ表出する発達課題」を抑圧してきているために、多様な自分の感情に対処できずに、不安になり、些細な対人刺激も回避しようとしているのではないか？  
現実生活の場面ではなく、描画という枠のある非現実世界で、この攻撃的感情の表出であれば、本人も傷つくことなく可能となるのではないかと考えて、MSSM<sup>3)</sup>を行いながらの面接とした。

【親への助言】

1. 「家以外の居場所確保」のために、適応指導教室見学を勧める。
2. 「学力補償」・「自分より少し先を生きる同性との実体験」のために、同性の家庭教師をつけることを勧める。

〈MSSM：相互ぐるぐる描き物語統合<sup>3)</sup>〉

：通常A4版の画用紙1枚に、クライアントに約6～8コマに区切ってもらう。じゃんけんで順番を決め、互いにグルグル描きをしては交換して、「その線からのみつけ遊び」を繰り返し、おおよそ2～4往復の相互グルグル描き投影をし合ったあと、これに色彩して、双方から投影された「見つけ出されたもの」をすべて入れ込んで、物語をつくる。グルグル描きによって軽い退行を起こし、投影によって拡散し、幾分希薄化した無意識と意識の自我境界を、物語構成で、意識の糸をつなぎとめる。よれゆえ、すぐれて治療的な方法となりうる。山中康裕により考案された。

〈適応教室〉

：不登校児童生徒の個々の状態に応じた援助を行う市町村の教育委員会が設置する教室。  
そこでは、学習支援を含めて、さらに、さまざまな体験活動を通して社会性を養い、社会的自立・再登校を支援することを目的とする。スタッフは各々の適応教室で異なるが、指導員・指導主事として運営されていることが多い。

3 面接経過

作られた物語の内容から3期に分けた。15回の面接を行い、10回MSSMを施行した。

第1期：周りからの力で攻撃を受ける物語 #2～#5

#2：初めてのMSSM～決意表明～

「不運の事故で死んだ中学生が転生して黒人となり、黒人を差別する白人と戦っていく物語」

■無表情で押し黙っているが、こころのなかには「周りの人と対決しようとする強い気持ち」の存在がセラピストに伝わり、本人のエネルギーを感じた。

□親からの報告：適応指導教室に週1回程度通い始めた。家庭教師をつけて勉強を始めた。

#3～#5：周りの力で、自分の意志に反して「○○させられる」つらい体験の物語が語られる。

登場する人は

#3：「宇宙人にさらわれる人」

#4：「魂をとられてしまった人」

#5:「自分の家をぐちゃぐちゃにされてしまった人」で、無抵抗で「現状を仕方ないな・・・」と諦めている人ばかりである。

■物語の内容は悲惨であり、本人も相変わらず発語は少ないが、MSSM施行中に、少し笑顔も見られるようになってきた。

#3:「勉強の遅れが気になる」と言う。

◀バウムテスト施行②▶

・枝は2本で尖っているが、樹冠のなかには収まっている。消しゴムも使用しない。5個の実も塗りつぶさずに描く。幹も太くなり、以前よりこころの安定感をセラピストは感じた。

□親からの報告:休日に小学校時代の友達が自宅にきた。勉強に意欲がでてきた様子。

第2期:他からの力を借りて相手と戦う物語

#6~#10

#6~#10:物語内容が大きく変化していく。「戦い」がテーマとなる。

#6:「王によって虫に変身させられた3人が自力で元の姿に戻り復讐する」

#9:「人を食う王と戦う。ピンチの時に太陽が力をくれて勝利する」

#10:「地球を襲う宇宙人に、月から力をもらったおじさんが戦い勝利した」

と、自分を襲う力と戦って勝利する人の内容となっているが、#9・#10共に、他から力をかりての戦いであることが気になった。

しかし、#7:では、「桜のない国の王が、部下に命じて根が折れないように丁寧に桜の木を土のなかに埋めた」内容が語られており、いつかの時期に花開く可能性をも感じた。

■表情が豊かになり、楽しそうにMSSMを施行する。

#7:「段々と内容が深くなってきたね」と言いながら、声を出して笑う。気持ちを「言語」で表現するようになる。

#9:夏休み明けの9月から、高校進学に向けて、今後は学校とのつながりを検討していくことを本児に伝える。

□親からの報告:不登校であることに不安を感じなくなってきた。家のなかでは、元気で、良く話すようになった。腹痛は訴えない。

第3期:言葉で気持ちを語り始める #11~#14

◀MSSM 施行しない ▶

#11:学校という場所で、担任とのつながりを持つことを目標とすることを提案する。「学校という場所に出向くとは、これから高校進学に向けて自信になる。今まで、頑

張ってきたが、今、もうひとつ頑張る時期である。」という内容を本児に伝え、「今は頑張れ!」と励ました。

#12~#14:

週に1回、中学校の相談室登校を開始する。相談室では担任と短時間でも会えるように、学校側と連絡調整した。

この時期は、面接が「言葉」で行われた。セラピストの問いかけにも、即座に返答できるようになり、表情も明るく、声もはっきりと聞き取りやすくなる。

進学先の高校名を具体的に言うようになり、その高校合格を目指して勉強に取り込む様子が伝わってきた。

受験勉強に取り組むために、#14:で中断することが本人から提案される。了解する。

第4期:終結~最期のMSSM #15

~自分の力で戦う~

#15:高校合格の旨を伝えにくる。表情明るく元気そうである。

MSSMを描く:

「海の魚がサメに襲われてピンチ。いつもなら変身ベルトで強くなれるはずが、ベルトを忘れてしまい強くなれない。そこで、強大な力を自ら得て、戦いました」

#### 4 考察~ネガティブ感情を安心して出すこと~

【最近のこどものこころの問題~やさしいこどもたち~】

教育相談機関・医療機関で出会う「不登校児童生徒」のなかには、斎藤のいう第2軸:発達障碍の要素をもったケースは多い。小学校時代から集団生活が苦手ではあるが、小学校という均質要素をもつ時代には登校できても、中学校という思春期◀仲間同士で集団を作り行動する:集団同一性▶には仲間を作れず孤独感を感じて、集団から離脱して不登校となるケースである。

しかしながら、発達障碍の要素を抱えている生徒が、全て不登校になるわけではない。どのような担任・友達と出会うか?どのような雰囲気もつ学校の状態か?はもちろん重要ではあるが、なによりも、「乳幼児期から、どのようなこころの発達をしてきているか?どのような関わりをする大人と出会ってきたか?」ということが、重要な要素であると考えている。

現代の子どもたちは、親に大切に保護され、かつ、経済的な豊かさのなかで育てられている。虐待通告数の増加は、養育水準レベルが上がったゆえの側面もあることを考慮する必要がある。もちろん、虐待を容認しているわけではなく、現実に悲惨な養育環境の子どもたちが存在するのも事実である。しかし、一般的な親の生活は現状の経済的豊かさを保持するために忙しく、わが子の「ネガティブな感

情]を受け入れる精神的余裕はなく、乳幼児期から、「素直で育てやすい良い子」を強く望む傾向は益々強まっている。「どうしたらちょっとしたことで泣かない子どもになりますか?」「どうしたら、こぼさないで、嫌がらないで、食べてくれますか?」「仕事時間に間に合うようにどうしたら子どもの支度ができますか?」「どうしたら友達と喧嘩しないで仲良く遊べる子どもになりますか?」 育児相談で受ける養育中の母親からの質問である。

また、親から大切にされた子どもたちも、親の期待に応じて、「自分のネガティブ感情表出」は愛する親を困らせる行為と認識し、罪悪感を抱くようになって、ネガティブ感情を抑圧することを学習する。《無意識ではあるが》こどもは親から愛されたいとともに、見捨てられたくないのだ。「周りを傷つけることを恐れる」やさしい子どもたちが増えていく。

#### 【思春期のこころの問題】

思春期になり、自分を見つめる時期、この抑圧してきた感情の処理に戸惑う子どもたちに出会う機会が増えた。周りにネガティブ感情をどのように表出してよいかかわからず、身近な親に対して突然にキレたりするこどもたち。長い期間、抑圧してきた分、そのキレかたは強いがために、そのあとに自己否定感が湧いて益々自信喪失となり、全ての人間関係を避けて、「ひきこもるこどもたち」。また、自分の抑えられない感情を言葉にすることは、制止が効かなくなり、相手を徹底的に傷つけてしまいそうで怖くてできないと「リストカットするこどもたち」。

このようなこどもに対しては、安心して、「ネガティブ感情」を人以外に表出する必要性がある。

#### 【描画表現の利点と学校との連携】

本事例は、「自己の攻撃的な感情」を、描画というやや無意識レベルの方法で安心してセラピストとともに表現して、そのあとで、「意識レベルである言語」で将来を語る

ようになったケースである。

カウンセリングは「言語という意識レベル」での関わりを通して行われることが多いが、「言語交流」は相手に対して直接的にぶつける方法であり、また、自分の行為の意味が明確に自分で認識できる特徴をもつ。周りからどのようにみられるかを非常に気にする「思春期」のこどもにとっては、言語レベルでの「攻撃的感情の表出」は本人を一層苦しめる。周りからの目、《キレるこども》として否定的に見られることに対する恐怖感が湧くからである。

それに対して「描画表現」は「自分の意識とは少し離れた無意識領域」で攻撃性～ネガティブ感情～を表出できるために、本人が不安になったり、恐怖感を抱かずに行えるという利点がある。抑圧された感情を表現することで精神的安定感をえられたと考える。

それ以降は、学校との繋がりは重要であり「本人の頑張り」を促し支える教師と相談機関の連携が必要である。「頑張り」もある時期、子どもには大切である。

#### 【これからのこどものこころに大切なこと】

こどものこころの問題は「大人の問題」であることの認識を強くもつ時代にきている。

「大人にとって都合のよい子ども像」を壊し、子ども自身がこころ豊かに育つには「大人がどのようなこども像を抱くべきか」を、こころの問題を抱えた子どもたちが教えてくれていることを真摯に受け止めて、認識する時代にきている。「大人にとって育てやすいこども」は「子ども自身は生きにくさを抱える」ことになるのである。

#### 【参考文献】

- (1) 文部科学省：平成20年児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題にかんする調査
- (2) 斎藤万比呂：『臨床精神医学』33：373-378 2004 アークメディア
- (3) 山中康裕：心理臨床と表現療法 金剛出版 44p 1999